

『どっきりテレビ』

作者 浅羽一

これはドッキリ企画である、と最初にお断りしておくのは後々の誤解を避ける為であり、またこの物語に関与する全ての人々に理解して頂く為であるのだけれど、それよりも何よりも重要なのは素直に考えて欲しいと言うことだ。それこそがつまりは、この物語の真意を知る上で最も簡単かつ決して欠かせない要素なのだから。

さて、まず登場するのは今売り出し中のお笑い芸人で、仮に名前はYとしよう。

まだ若手と称されるYは普段から派手な女遊びを指摘されており、テレビ番組の暴露企画などでもたびたび話題に上っては、酷い男としてお茶の間の反感と笑いを浴びていた。しかしながら、その一方で確かに女性からの人気があるのも事実で、彼と噂になった相手にはアイドルや女優などの名前も挙げられていた。

季節は春、某テレビ局の会議室で一つの番組の企画が打ち合わされていた。それは内容の新鮮味にこそ欠けるものの、ある程度の視聴率を期待出来る、要するにドッキリ企画だった。

概要はこうだ。まず、芸人Yにとある特別番組の出演依頼が来る。それは初夏の番組改編期に放送される旅番組で、大御所から若手まで数々のタレントが何組かに別れてそれぞれ目的地である海外に渡り、その地で味わえるグルメや穴場の観光スポットなどを紹介していくと言うものだ。そしてまた、番組の最後には、スタジオのゲスト陣からロケの模様を見て一番行ってみたいと感じた国のアンケートを採り、最終的にどのチームのプレゼンが最も優秀だったかを選択する。単なる旅番組にありがちな地方紹介だけでなく、色々な国に行った経験を持つタレントをして行ってみたいと思わせなければならぬと言うことで、各チーム同士の対抗意識をあおり、同時に団結力も高められるわけだ。それは仲間として、そして或いは男と女として。しかも、旅行プランの詳細は現地に着いてから地元民の情報を元にタレント自身がチーム内で相談して決めるのだから、尚更だった。

Yの同行者は芸人コンビの相手であるKと、子供向けのヒーロー番組のヒロインとして一躍人気者になったグラビア・アイドルのMだった。言うまでもなく、騙され役を除いた全員が最初から全てを承知しており、彼らと競い合うチームなど存在しなければ、そもそも旅番組として放映される予定もなかった。

こう言った内容の番組を制作する際に常々重要となるのが、いかにそれが真実であると信じ込ませられるかと言うことだった。だからこそ、スタッフから台本まで一切が完璧に仕込まれ、予算はそもそもゴールデン・タイムの特別番組に相応しい額で、実際、それはその気になれば本当に豪華な旅番組として完成させられるほどのものだった。

打ち合わせは綿密に行われ、やがてYとK、それからMの顔合わせの日がやってきた。あらかじめ、Yには他のスタッフなどからさり気なく、Mが彼のファンであるらしいと伝えられていたこともあり、初対面に感激する彼女に対する彼の反応はまんざらでもなさそうなものだった。

決定事項としてあったことは行き先と、その国を旅する上で最低限必要になると思われる公用語を学ぶ為のスケジュール、それから二泊三日の期間で使える一人当たりの資金の上限だった。

まず、事務所やマネージャーの全面協力により、外国語のレッスンの予定は不自然にならない範囲でYとMが二人きりになるよう調節された。幸いにして、Kには本当に己の学歴を活かして一人でレギュラー出演しているクイズ番組があり、その計画は大した支障も

なく遂行された。ロケまで一ヶ月という短期間で効率的に能力を向上させる為と、週に約二回程度のレッスン中は外国人の先生と生徒のみが教室に入り、一回につきおよそ三時間、途中に休憩を挟みつつも真面目に授業が行われた。ちなみに、三人が揃った唯一の授業でもある初回の休憩中に、MはこっそりYとだけ携帯電話の番号やメール・アドレスの交換をしていた。

他の国の話ではあるもののグラビアの撮影で海外経験のあるMと違い、YとKにとっては初の海外ロケだった。そのせいもあって、隠しカメラには、打ち合わせ当初からYだけでなくKまでもが興奮している模様が映し出されていた。

出発日は間もなくやって来た。前日の夜にYからMへと送られたメールには、カラフルな絵文字が満載で「楽しみだね」とか「困ったことがあったら俺に任せろ」とか終いには「カメラが止まったら二人で探検しようよ」とか。あまりと言えば滑稽で、見ている方が恥ずかしくなりそうなそれは、あたかもYがMに対して惹かれつつあると代弁している風だった。

旅の舞台は白いタイルと青い海が象徴的なヨーロッパの田舎で、豊富な海の幸を始めとして、中世から残る建築物や世界遺産指定もされている遺跡など観光の目玉になりそうなものは幾らでもあった。同時に、まさしく映画の場面さながらの景色は、ロマンチックな雰囲気盛り上げるものとして最適だった。現に、ロケの合間、撮影カメラが止まっている（隠しカメラは別）時にMが美しい光景に歓声を上げるたび、Yも一緒になっではしゃいでいた。

勉強の甲斐があったのか、Yの使う外国語はなかなかのもので、反面、Kはほとんど喋れず間抜けな姿ばかりをさらし、自然とYがチーム内でリーダー・シップを発揮するようになっていた。ロケも順調に進み、中でもYが現地の老人から教えられた海岸沿いの一角は、小さな砂浜を隠すようにそびえる白い岩壁に海の色が反射して幻想的な色彩を作り上げると言う、まさに絶好の穴場スポットだった。と言っても、事情を把握している仕掛け人にとってその旅ロケの成功は悲しいかな本来の企画の一要素でしかなく、そう考えると少しばかり勿体ない話でもあった。

YとMに動きがあったのは二日目の夜だった。最終日を翌日に控え、二人きりでロケの成功とスタジオでの勝利の前祝いをしようと、ホテルを抜け出し、現地のコーディネーターから教えられた海辺の隠れ家風レストランへ向かったのだ。勿論、Kを含めた他のスタッフには内緒だった。

私も一緒に付いていこうと申し出たコーディネーターを断ったのはYだった。店の場所はそう遠くないし、何より自らの現地語はすでに完璧だから大丈夫だと、それでも何かあったら危険だからと心配そうな彼に対して、Yの態度は見事なくらい理想通りだった。

午後八時過ぎ、時間差でホテルを出た二人はその前で合流し、やがて並んで歩き出した。都市部でないヨーロッパの夜は主要道路でも人通りが少なく、ましてやアンティーク調の街灯にぼんやり照らされる海岸沿いの歩道に日本人観光客なんて一人もおらず、いつしか二人は手を繋いでいた。煉瓦造りの手すりは海への落下防止よりも雰囲気作りこそを目的にしているようで、しっとりとした音楽の似合いそうな空間において、隠しマイクに拾われるYの声は今にもスキップを始めそうなくらい弾んでいた。

事態が急変したのは店まで残り百メートルという時だった。突然、暗い路地から一人の

男が飛び出してきて、戸惑う二人に小声ながらも荒々しい現地語でまくし立ててきたのだ。いきなりの出来事に、何、何と不安そうにYの背中へ抱きつくM。間の悪いことに周囲の建物は一様に真つ暗で、助けてくれそうな者は誰もいなかった。ハンチングを被った男はひよろりとして、いかにも危なそうだった。

走って逃げ出そうにもMにしがみつかれていたのでそうもいかず、とにかく男を落ち着けようと、Yが自慢の現地語で話し掛けた。

まるで通じなかった。それどころか、男はさらに苛立ったようで、加速度的に口調が激しくなっていく。慌てるYの背後でMが泣き出しそうな声で恐いと漏らす。早くも焦れたらしい男が舌打ちをして、懐に手を伸ばした。

Mが悲鳴を上げて、Yも驚きのあまり後じさった。男の手には剥き出しのナイフが握られていた。

折角習った内容も忘れてノー、ノーと叫ぶYと、パニックに陥ったのか本気で泣き出し、腰を抜かすM。すると男はナイフをYへ突き出すように振りながら、もう一方の手でその場にへたり込んでしまった彼女の腕を掴もうとした。最早、Mは抵抗することも出来ず、幼児さながらに泣きじゃくっているだけだった。

止めろ、と男の手を振り払ったのはYだった。そして彼は途端に激昂した男を前に一歩も退かぬまま、切羽詰まった声でMに逃げろと言った。誰か呼んできてくれ、と。

果たして、Mは動かなかった。と言うよりも、動けそうな状態でなかった。

男が襲いかかってきたのは、Yが再びMへ何かを言おうとした、まさにその瞬間だった。もみ合いになるYと男。静かな夜にMの泣き声が響く。おそらくナイフを挟んで力比べをしているのだろうが、向き合った状態で二人の男が行ったり来たりを繰り返す。

時間にすれば二十秒もなかっただろう。男達の動きが停止したのは唐突だった。高性能のマイクは、かすかに発せられたYの声を拾っていた。

見るからに不安定な大股で、男が一步、二歩と後ろへ下がる。Yはその場に呆然と立ち尽くしたままで、それまで泣いていたMも敏感に気配を察知したのか顔を上げて男を凝視していた。

街灯しか照らすもののない中でも、その様子は十分に分かった。男の胴体の中心からナイフの柄が生えていて、その服が見る間にどす黒く染まっていった。そして男は他の誰でもなく彼自身が最も驚いていそうな表情でふらふらと手すりへ近付き、やがて我に返ったYが掴まえる間もなく夜の海へと落ちていった。海水を叩く音だけが響き、余韻が消える。と世界は再び静かになった。

：先に声を取り戻したのは、Mだった。嘘でしよ、とタイルの上でへたり込んだままの眩きは、むしろ明るく、それが逆に痛々しかった。

何も言わないYの傍らで、何でこんなことになるのよ、もう無茶苦茶だよ、嘘でしよ、どうしよう、とMの茫然自失の眩きが続く。

ようやく彼がそれに応えた時、その声はいっそ決然としていた。逃げよう。彼は小さく、けれどはつきりと言った。

え、と理解出来なかったのか顔を上げたMの腕を、Yが掴んでその身を抱き起こした。逃げよう。早くしないと、誰か来るかも知れない。Yの口調は焦っていて、しかしそれ以上に真剣だった。

何を言ってるのと、Mがかすれた声で聞き返した。そんなこと出来るわけないじゃない。途切れ途切れの言葉は弱々しくも、拒否を示していた。

Yの声が厳しくなったのは直後だった。捕まったらどうなるか分かってんのか。恐怖がまだ体に染み込んでいるのだろう、びくっと体を震わせたMに対して、彼は噛んで含めるように続けた。曰く、こんなことが表沙汰になったら、このロケだけじゃない、番組自体が台無しになるんだぞ。分かっているのか、これにどれだけの金が動いているのか。正当防衛だとか関係ない。もしもそんなことになって見ろ、俺達はもう二度とこの業界にいられなくなるんだぞ。

そしてYは完全に声を失ったMの両肩を掴み、仕方なかったんだよ、と一転して諭す風に告げた。君は恐怖のあまり動けなかったし、俺はそんな君を守ろうと必死だったし、他に方法なんて無かったんだよ。だから、あんな奴の為に俺達が未来を失う理由なんて一つも無いんだよ。

それはあたかも、お前のせいであいつが死んだんだ、そう言っているようでもあった。だからお前も共犯だ、と。

重たい沈黙が流れた。

冷徹に数字のみを見れば、男が飛び出してきてからこの時まで、およそ五分にも満たない間の出来事だった。だけど、それは状況を考えれば決して短いと言えない時間だった。

一刻も早く現場を去らなければ、今にもその路地から別の誰かが顔を出すかも知れない。

だが、それでもYは、ひたすら待った。しっかりと両肩を掴んで、真正面から彼女を見つめていた。

長い、とても長い思案の末に出されたMの答は、無言の頷きだった。

行こう。そう言うが早いのかYがMの手を握って歩き出した。それはホテルの方向、ではなく、向かう予定だったレストランの方だった。

当然と言うべきか、Mは驚いてちよっとと声を上げたが、Yは即座に良いからと強い口調で言い返した。

コーディネーターに店に行くって言ってるんだから、このまま帰ったら逆に怪しまれるだろ。Mの手を引きながら語るY。

なるほど、それも一理ありそうで、現にMもそう感じたからか、それとも他に何か重要なことでも思い出したのか、あ、と声を出したきり以降は黙って彼に従った。

残り数十メートルを二人は足早に歩いた。それはまるで思いがけない数分の遅れを取り戻そうとしているようであり、或いは迫り来る何かから逃げようとしている風でもあった。

二人は最後まで手を繋いでいた。

レストランは歩道から伸びる栈橋のようなものの先にあり、板張りの道は真つ直ぐ明るい入り口へと続いていた。二人はタイルから足を浮かせる際、一度だけ立ち止まり、確かめ合うように互いを見た。Yが何も言わずに頷くと、ややあってMも小さく頷いた。そして彼らはゆっくりと歩き出し、そっとガラス張りの扉を開けた。

乾いた破裂音が立て続けに響いたのは、二人の背後で入り口の扉が完全に閉まった直後だった。

驚きのあまり凍りつく騙され役の前に、警察官の格好をしたKと、さらにはこの瞬間の為にずっと秘密裏に彼らを見守っていた先輩芸人が飛び出してきた。何台ものテレビカメ

ラや照明器具が並ぶ中で、二人が持っていた玩具の拳銃がパンと鳴り、えく、マジかよ何だよこれくと、不自然さ丸出しの芝居で慌てるYの傍らで、Mは複雑そうな表情で立ち尽くしている。

がちやりと、先輩芸人の取り出した手錠がMの手に掛けられた。

…え、と全くもって理解しがたい展開にMが声を漏らすと、続けてKがわざとらしい口調で殺人容疑で逮捕するとYの手首にも手錠を掛けた。顔面蒼白で直立するMの傍らで、Yが正当防衛だったんですと情けない懇願を始めた。すると今度は、それに応えるように店の奥からあの男が現れて、流暢な日本語でいやいや許さないよなどと笑って見せた。男の胸にはまだナイフの柄が生えていた。

要するに、一向に女癖の治らないYを懲らしめる為にMを使ってドッキリを仕掛けようという使い古されて飽きられた企画ではなく、そのつもりで頑張っているMを逆に有り得ない状況に陥れて反応を見てみようと言う、悪趣味としか評しようのない企画だったのだ。

そう理解したMの反応はと言えば、心の底からの号泣で、テレビ画面の真ん中で小さなくなくなった彼女を取り囲む悪役の映像は、凄まじい数の苦情を生んだ一方、衰退の一途を辿るバラエティに革命を起こしたと絶賛の嵐を呼び、事実、史上稀に見る視聴率を叩き出した。

そう、結果的に言えば、大成功だったのだ。それだけは間違いない。

大画面を眺めながら、俗に言う所の神はそれを実感しつつ、さて、これで決まったなどと呟いた。そこでは泣き崩れるMの映像を見て、憤ったり、憐れんだり、笑い転げたり、大喜びしたりしている無数の人間が映し出されていた。

決まりましたか。傍らで、部下らしき存在が神の言葉に恭しく返す。宗派によって呼び方が変わるであろうその声音は、人形よろしく淡々としたものだった。

ああ、と頷いた神はその手の一振りですべての画面を消してから、明日、地球全土に大地震を起こす。生き残るのは、それに相応しい者だけだ、と語った。

すると部下は、またしても平坦な口調で、準備は万端整っております。

神はそんな態度に、まるでお前は面白くない奴だなどとも言わんばかりに一瞥をくれるも、早々に機嫌を直し、やがて遙か彼方まで広がる天下へと視線を移した。その様子はさながら単なる観客じみている反面、あたかもこの世の責任者として全人類と世界の進行を確かめているようでもあり。

びっくりするだろうな。

待ち遠しそうに語る神の横で、部下はいつまでも無感情な眼差しのみを浮かべていた。

〈了〉